

国頭村教育委員会「学びの共同体」SV招聘公開授業研究会
国頭中学校視察（午前）・奥間小学校公開授業研究会（午後）

平成28年度、第3回国頭村教育委員会主催「学びの共同体」推進事業スーパーバイザー招聘公開授業研究会が10月6日奥間小学校で開催された。今回は「学びの共同体」提唱者の学習院大学教授佐藤学先生を招聘しての研究会である。村教育委員会は、年に3回「学びの共同体」のスーパーバイザーを招聘し、子ども達の学びの保障、教師の授業力と資質向上を目指し公開授業研究会を開催している。村内の小規模校では自力で研究者を招聘し、研究会を開催することは明らかに無理である。しかし、国頭村



は教育行政の手厚い計らいがある、1学期には一般社団法人麻布教育研究所永島孝嗣先生、2学期の村内小学校交流学习には國學院大学の齋藤智哉先生による授業研究会の開催を支援している。学校と教育行政の連携や支援の在り方が問われる中、ここ国頭村の教育行政は、『子ども達の学びの保障』と『教師の授業力の向上』という大きな目標とテーマを同時に遂行できる環境を整えている。本日、学校と教室を開いてくれた、国頭中学校、奥間小学校の校長先生や、教室を開き授業公開に応じてくれた教師達に敬意を表したい。真摯に感謝の念につきます。

〔国頭中学校〕



〔1年国語：古文のかなづかい〕

村内7つの小学校（へき地5校）から集束された生徒達である。授業ではほとんど違和感なく仲間と協同へ向かう。生徒達の頬もゆるく、穏やかに授業が進行する。授業者も国頭中4年目の教師である。生徒も教師も安心してすべての生徒が参加する授業づくりへの挑戦。4年目の教師の声を大切にしたい。



〔2年音楽：合唱コンクールに向けて各パート練習〕



今年度赴任してきた教師、前には名護市の東江中学校に赴任されていたこともあり「学びの共同体」や協同学習には少なからずの知識と経験がある。先週は齋藤智哉先生の訪問があり、今日を迎えている。来週にはインドネシア教育視察団の訪問を控えている。・・・こんな忙しい学校にどんな感想をもっているだろう

授業は校内の合唱コンクールに向けた練習が中心となっている。感心したのは授業者の表情と言葉である。まだ定臨の教師いうが、言葉や表情に余裕のような「安心感」が感じられる。生徒と教師の言葉のやり取りがやわらかい。

教師自身が持ち備えた授業センスがあるという。穏やかな空気に包まれた音楽室は、教師と生徒の「言葉」や「間」が呼吸と目線を合わせる空間を創っている。



「聴き合い・支え合い」は結局、生徒達のよりよい関係づくりに寄与する。

国頭中が「学びの共同体」に手を挙げて6年目になる。改革の当初から様々な試行錯誤が繰り返されて今があることを忘れないでほしい

村教育長は言う「点数なんか気にするな。すべての生徒の学びが保障され、すべての生徒が主体性を持った主人公になれる楽しい学校を創ってくれ・・・」。6年前には決して聴くことのできない言葉である。



奥間小学校公開授業研究会（村内職員研修）

- ◇ 平成 28 年 10 月 7 日（金）
- ◇ 5 年 男子 8 名 女子 10 名 計 18 名
- ◇ 授業者：M・M先生 ◇ 教科：国語科（物語文）
- ◇ 教材名 「大造じいさんとがん」
- ◇ 本時の目標：情景描写から大造じいさんの心情をとらえる。



[授業者より]

「大造じいさんとがん」では、何度も繰り返し読ませることで物語文のおもしろさや表現のよさを味あわせたいと考えています。子どもの学びを切ることなく音読にもどし何度も読ませたいのですが、そのタイミングはどうか？また、子どもの発言やつぶやきをうまくつなぎ、子どもの学びが深まっているか？参観者の目から見た子どもの姿勢や教師の姿を教えていただけたらと思います。よろしくお願いします。

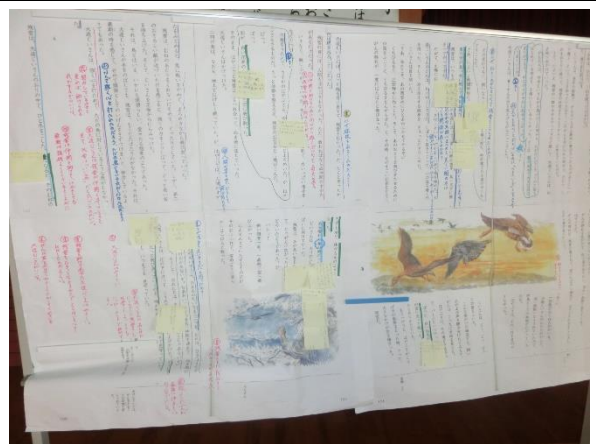
[公開授業研究会の意義] ⇒ ベクトルをそろえる。

地域の学校小中連携について、さまざまな立場や視点から議論される。7つの小学校の児童が中学校へ進学した時、校長先生の経営ビジョンや教師の理念、授業スタイルが同じであることは、生徒にとって中1ギャップを乗り越える「安心」が約束され意義深いものとする。



さらに村内のすべての教師が1つの授業を参観して学び合い、教室の授業実践が同じ方向にベクトルが向けられることになる。

右の写真国語科の授業で活用される大型教科書である。教室の子どもの声の音がしっかり反映



されている。モノやコトには必ずその目的や意義がある。大型教科書を活用する目的と意義についても各学校で共通理解されたい。ホワイトボード等も同じである、「使えばいい」ではその形式だけの学習行為が遂行され、一番大切なシンキングボードとしての意義や、生徒がつながるアイテムとしての目的や意義が達成されない場合が多くなる。・・・公開授業の目的や意義も村内の各学校で達成されたい。



[研究協議会から学ぶ]

他校の研究協議会から学ぶ。佐藤先生の講演会の前に、奥間小学校の職員による研究協議会が行われた。授業の中で割り当てられたグループを観察し、子ども達の学びの事実をもとに授業について全職員で研究を深める。「どのように学びが発生し、進んでいったか？」「どこで学びの躓きが見られたか」等、本音でシビアに語られる。



大切なことは、周囲で様子を参観している参加者たちが、この協議会から何を学んだかである。ぜひ、各学校でも、同じスタイルで校内研を進めてほしい。

[佐藤学先生より]

【国頭中】

- ☆ 「学び合い」や「支え合い」の質は明らかに成長している。もっと全員参加にこだわってケアを心がけほしい。⇒ ケアの必要な生徒を見極める。眼をそらさない。声かけ。仲間につなぐ等。
- ☆ 生徒の学び合いの質の高めるため、教師のジャンプ課題のレベルを上げる研究が必要となっている。
- ☆ 小学校での取り組みが生かされている。中学校では学びの質にこだわりたい。

【奥間小】

- ☆ 「課題中心主義」の読みから「作品中心主義」の読みへの授業視点のシフト
- ☆ 一人ひとりの読みを深めるためにも音読を大切に⇒12分以上入れる。
- ☆ 子どもとテキストとの対話を大切にあげる。⇒ のめり込む（夢中にさせる）
- ☆ 自分の読みを広げるためにも、音読は自分のペースで読ませたい。自分のペースでしかお話を描けない。描きながら読むことが大切。
- ☆ 教師の「問い」の言葉をシンプルに（例）「大造じいさんは、どう見えていたんだろう。」



国頭学びの会ゆい